

2014年2月16日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 17章 22～37節

説教：人の子の現れる日

1 世の終わりの時

1) いつ、どこで

東北の大震災と、それ引き続いて起きた原子力発電所の事故が起きてから間もなく三年が経とうとしています。あのとき、テレビで映し出される光景を見ながら、もしかしてこれが世界の終わりなのだろうかと強い不安をいだいたことを思い起こします。

聖書は、世の終わりは必ず来ると断言します。今日の箇所では、「人の子の日」とか「人の子の現れる日」ということばが、終わりの日を意味しています。終わりの日が来るのが避けられないとするなら、ではそれはいつ来るのか、その日何が起きるのか。どのように備えたらよいか。誰もが知りたくなります。二千年前の弟子たちも同じでした。

イエスは、世の終わりについてどのようなことを教えてくださったのか、今日はそのことを見ていきます。

2) そのときに起こること

イエスは創世記に書かれているノアとロトのことを引き合いに出しながら、世の終わりのことを説明しています。27、28、29節。「ノアが箱船に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日に、日と硫黄が天から降って、すべて

の人を滅ぼしてしまいました。」

アダムとエバが神に背いた日以来、この世界に罪というものが入り込みました。罪がそのまま放置されることはありません。いつか必ず取り扱われます。それが終わりの日、あるいはさばきの日とも呼ばれます。

人の子の現れる日に、どんな事が起きるか、ここにはいろいろ書いてあります。「ふたり寝ていると、ひとりを取られ、ひとりが残される。」これを読んで複雑な思いをされるはずですが、自分は、取られるほうだろうか、それとも残されるほうだろうか。さばきの日がいつ来ても良いように、毎日緊張して過ごしなさいと言うことか。でも、それでは疲れてしまいそうだ。急に不安になる方もいるでしょう。

2 人間の罪と神のさばき

そもそも、どうして神は罪をさばかなければならないのか。愛の神なのだから、さばきという恐ろしいことなどはせずに、すべての人を救えばよいではないか。そういう疑問が必ず出て来ます。

一つの例として、実際にビジネスマン向けのセミナーであった話を紹介します。大切な商談を成功させたいと思うなら、まず朝シャワーをして身をきよめなさい。セミナーでそういうお話があったそうです。これを聞いて、私は妙に感心しました。罪とか汚れというのは聖書の世界だけではなく、日本の文化にもしっかりと根付いている意識なのです。

けれども、教会に初めて行って「あなたは

罪人です」と言われたとき、どんなふうに思いましたか。多くの人が反発します。「私は罪は犯していない。」どうして反発するのか。罪とは、水で洗い流せるものだと思っているからです。あるいは、良いことを行えば、罪は消える。そんなふうに思っているから。罪は消えるのですから、結局、神のさばきは必要なくなるわけです。

本当に罪は消えてなくなったのでしょうか。むずかしく考える必要はありません。皆さんの心の中にあるものを見れば一目瞭然です。「あんな人、いなくなればいいのに。」そう思ったことがあるなら、すでに「殺してはいけない」という律法に背いています。あなたは罪人だと言うことになります。父や母を憎み、自分に都合がよいようにうそを言い、隣の人が持っているものを見て、うらやましく思ったり、ねたみを覚える。これが私たちの心の中にある現実です。これが聖書で言う罪です。

心の内によくない思いを抱えておきながら、一方では神のさばきは厳しすぎると言う。まことに身勝手なのは、私たちのほうです。

3 神の国のはじまり

1) 死体とはげたか

多くの人は自分のなかに悪い思いがあることを隠そうとします。心の中で神のさばきを恐れています。ですから、自分は物わかりのよい善良な市民であるとのふりをしようとします。そうやって平安な日々を過ごしています。かつての私がまさにそういう人間でした。けれども、いつまでも平安な日々が続くわけではありません。偽りの仮面をはぎ取られて、本当の自分が表にさらけ出される日がやってきます。いつでしょう。どこで

しょう。

37節にこうあります。「弟子たちは答えて言った。『主よ。どこですか。』主は言われた。『死体のある所、そこに、はげたかも集まります。』」

いったいこれは何の意味か。説明が必要です。弟子たちは、イエスが語ることばの意味を誤解していました。「人の子の日がやって来る。」

弟子たちの耳には、そのことばが、もうすぐ革命戦争が起きる、いよいよイスラエルに神の国が打ち立てられる、と聞こえています。ですから、弟子たちは興奮して質問しました。神の国を打ち立ててくださる人の子は、どこで革命の旗を揚げるのですか。

イエスはこう答えました。「それは死体のあるところである。」何とも不気味な話です。いったい誰の死体なのでしょう。戦争で多くの使者が出るということなのでしょう。イエスは一つのヒントを与えています。死体そのものを捜すのではない。死体に群がる「はげたか」の群れを捜せば、すぐに場所を見分けることができる。

野生動物の世界を扱ったテレビ番組などでよく見かけるシーンです。獲物を仕留めたライオンが肉を食いあぎって、その上空にははげたかが円を描くように舞っています。死体がどこにあるのか遠くからは見つけることはできません。けれども、はげたかが集まっているところは遠くから見えます。その下には死体がある。そういうことわざです。

神の国はどこから始まっていくのか。人々は大きな関心をもってイエスに尋ねます。返ってきたのは意外な答えでした。死体のある所。はげたかの集まる所。人々は神の国と聞いたとき、それは輝かしいすばらしい世界

だと何の疑いもなく信じました。けれどもイエスの答えは、その正反対です。死体のある所。この世のなかで最も忌まわしい場所です。のろわれた墓場です。神の国からもっともほど遠いと思われた場所を、イエスは指し示しました。

それは、いったいどこなのでしょう。イエスが言われた、「はげたか」とはもちろん実際の鳥のことでなく、「貪欲な者たち」のたとえです。「貪欲な者たちが集まっている死体を捜しなさい。そこに神の国が打ち立てられている」、とイエスは教えました。

その場所は一箇所しかありません。十字架です。神のひとり子のからだがかぶられている十字架の周りに、貪欲な者たちが集まりました。人々の心の中にあるものがすべてあらわにされたところが十字架でした。十字架は、私たちの心の中にあるすべてのものをあらわにざらざら一切を光の中にさらけ出していきます。

2) 人の子の現れる日

私たちは、水で洗いきよめることのできない罪と汚れで苦しんでいます。こんな自分でよいと思う人はいません。何とかしたいと思えます。けれども自分を改めることができません。これが罪の現実です。そんな私たちを救うために、神はひとり子イエスを私たちの所に遣わします。この方は、私たちを救うために多くの苦しみ受けられ、この時代から捨てられていきました。

私たちは、十字架のイエスをよく見ているのでしょうか。よく見えないと言うのでしょうか。どうすればもっとよく見えるのでしょうか。近づきしかありません。どんなふうにして近づくのか。自分を着飾ってですか。何でもでき

る自分ですか。ほかの人よりもすぐれた自分ですか。神に忠実で、信仰に熱心な自分でしょうか。そんなふうには、がんばって神の前に出るのでしょうか。

聖書に何と書いていますか。神の国はどこに来ると言っていますか。もう一度読みます。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

なんともいまわしい、顔をそむけたくなるようなことばだと思ったことでしょうか。けれども勘違いしないでいただきたい。これは恵みのことばです。どこが恵みか。

死体のある所に集まったのは誰ですか。はげたかだと書いてあります。言ってみれば、十字架に集められたのは美しい白鳥ではなかった。はげたかだった。主は、白鳥を救おうとしたのではないのです。はげたかを救おうとされたのです。十字架のそばには、罪をむき出しにした人々が群がっていました。十字架はそのような場所なのです。みなさんは、この「はげたか」のひとりであると自覚していたでしょうか。白鳥でなければならぬ。そう思っていないでいいですか。とんでもありません。はげたかは白鳥になれません。

イエスを十字架に追いやり、好き放題のことを叫び、ののしり、怒りをぶつけていた。自分もそんなはげたかのひとりであると思うのなら、あなたの心のうちにすでに神の国は来ている。イエスはそのように約束してください。

とは言え、神の子の日、さばきの日、それがいつであるかは、父なる神のほかは誰も知りません。いったい、毎日をどのように過ごしたらよいのでしょうか。最後にそのことに触れておきます。

27 節に「人々は、食べたり、飲んだり、

めとったり、とついだりしていた」とあります。私たちは外から見るなら、ノアの時代の人々、ロトの時代の人々と同じような生活をしています。それではいけないと言うでしょうか。いいえ、これでよいのです。さばきの日がいつ来ようとも、私たちは毎日を普段どおりに過ごします。食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしています。草花の種を蒔き、木を植えます。今皆さんがしていることをそのまま続けるだけです。

それでも、さばきの日が来たらどうしようと心配しますか。なにもあわてることはありません。なぜなら、すでに私たちのうちに神の国が備えられているからです。神のひとり子が苦しみ、いのちを捨てて与えてくださった神の国です。誰もこの恵みを奪うことはできません。